

財団だより

# 多摩川

1998.3 第77号



マムシ (マムシ科)

毒ヘビ。体は太くて短い。頭は三角形。胴に硬質のような形の模様がある。河原の浅った場所に住むがそれほど多くない。カエル、トカゲ、ネズミなどを捕えて食べる。秋に10頭前後の子ヘビを産む。全長45cm～60cm



【上】ニヶ領用水・円筒分水



【右】復元された次大夫堀 (次大夫堀公園内)

## ■多摩川現風景■

### (33) 甦れ！四ヶ領用水

400年前の1597年、小泉次大夫によって多摩川右岸のニヶ領用水と、多摩川左岸の六郷用水が着工された。14年の後、完成し、右岸のニヶ領(稲城領、川崎領)、左岸のニヶ領(世田谷領、六郷領)あわせて四ヶ領の人々が、農業用水、生活用水として四ヶ領用水の恩恵に浴したのである。同時期に川の兩岸につくられた、珍しいこの双子の用水は、兩岸の人々の強い絆を示すものであり、野毛、二子、等々力など共通の地名が示す、川の変遷をもあわせて物語るものである。

現在では、右岸のニヶ領用水は、その景観を愛でる人々により、「ニヶ領用水八景」などが選定され、市民の水に親しむ空間として新しい役割を果たしている。左岸の六郷用水は、「幻の六郷用水」とよばれるほど、過去の姿をとどめていない。都市化により、農業用水としての役割は失われ、暗渠、道路などになって寸断されてはいるが、一部は丸子川として残っており、次大夫堀公園や、六郷用水公園など復元の動きもあった。

着工400年という節目を迎え、いろいろな行事が企画されている。昨年11月には、市民、行政、企業、学校などのパートナーシップにもとづく、「多摩川四ヶ領用水400年の会」が発足した。

「温故知新」～昔のことを研究して新しい道理を見つけること～という言葉もある。400年前の先人の偉業をしのび、兩岸の人々が交流して、真剣に用水の再生を考えることによって、新たな「四ヶ領用水」が復活する機運となれば、この工事に全力を投じられた小泉次大夫、田中休愚を先頭とする多くの人々も、草葉の陰でよろこばれることと思われる。

### ●関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

- ①多摩川における応用地理学研究  
一流域開発に伴う多摩川の水環境の史的変遷—  
1977年 市川 新 東京大学 (No.3)
  - ②多摩川の水利開発史と水利調整に関する研究  
1982年 宮村 忠 日本河川開発調査会 (No.52)
- 〈一般研究〉
- ①狛江市に存在した中小河川、用水、清水の調査  
—狛江第三小学校を中心として、昔の生活や発展を中学年・高学年の社会科教材として—  
1986年 野村義子 狛江第三小学校 (No.48)
  - ②多摩川下流域における築堤がもたらした堤内地の環境変化に関する史的的研究  
1989年 平野順治 大田区郷土の会 (No.59)

# 多摩川散歩

## ■矢川の水草マップ・絵はがき等発行■

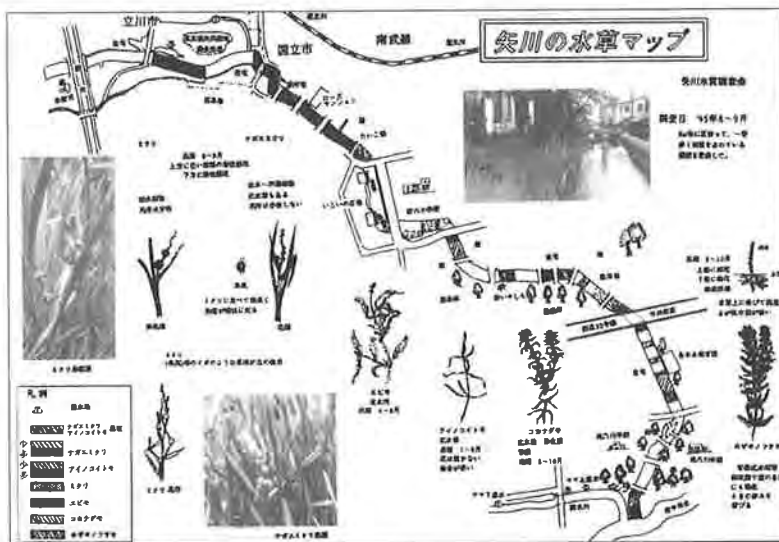
矢川水質調査会 高橋 福子

♪春の小川は…の歌のような清流、川面には水草がそよぎ、水面にはアメンボが走り、楽しそうな子供達の声が聞こえてくるそんな情景がうかんでくる矢川。矢川は、立川段丘と青柳段丘の崖線沿いの立川市羽衣町部分に湧き出す湧泉を水源として、滝の川学園下の府中用水合流地点までを流れる1.5kmの短いかわいらしい川です。私達は、12年前からこの身近な川を通して私達の暮らしが川に及ぼす影響を調べたいと思い調査をしてきました。調査は毎月一回、ポイント8ヶ所で水質調査、流量測定を行いながら水質の変化を見てきました。そして観察会や聞きとり調査も合わせて行い人々の暮らし、そして水行政の変遷が矢川の姿となって現われていることを知りました。矢川には清流でしか生きられない貴重な命を多く育んでいます。川面に繁茂するナガエミクリ、太古の昔から生きてきたホトケドジョウ、シマアメンボ、これらは都内の川ではほとんど見られなくなった生物で、清流であることの証でもあります。私達が調査をしてきた12年間には、矢川にとつていろいろな出来事がありました。調査開始当時は、

上流の水質は良好でしたが下流部分は家庭雑排水の流入でどぶ川状態でした。それが1989年からの下水道整備工事で水質は上流同様、下流も良好になりましたが工事時の影響で中流域の水草、ナガエミクリが激減し、また1990年に国立市の行った親水工事で三面張りに改修した部分もナガエミクリは壊滅的状况で今も回復できていない部分です。1995年2月の水濁れでは、川底には水の流れはなくなり'96年の2度目の水濁れは、ホコリがたつ程の川底になりました。矢川のシンボルでもあるナガエミクリは跡形もなく消え去り都市化の波に、この小さな1.5kmの川が、まともに影響を受け、また自然の大きな力に身をまかせるすべしか方法がなく、この小さな川の回復力を期待しつつ、今後もこの素晴らしい矢川を明日の子ども達へとつないでいく為にも観察、調査をし水循環を生かした街づくりを行政、市民へ提案して行きたいと思っています。この12年間の調査をある時どきでまとめた冊子、マップ等を紹介します。

- 矢川からの手紙 1988年発行 在庫なし
- 続矢川からの手紙 1992年 " 頒価300円
- 絵はがき(5枚入) 1994年 " 頒価500円
- 矢川の水草マップ 1996年 " 在庫少々

以上冊子、マップ等の問い合わせは矢川水質調査会 高橋まで TEL 042-574-8000



▲「矢川の水草マップ」1996年発行

## 私と多摩川



97年度多摩川学校“源流合宿”にて —笠取山頂上—

多摩川レンジャー 島田 咲子

「出身地はどこ？」と尋ねられると、私は「う～ん、どこかなあ」と答えることが多かった。別に冗談で答えをはぐらかしていたのではない。多摩川に出会うまで、私は「出身地」というものを感じたことも意識したこともなかったのだ。

私の両親の実家は二軒とも都内にある。小学生の頃は“田舎”のないことにコンプレックスを感じた。また、引越しも多かった。「孟母三遷」とはいうけれど、千葉北西部～東京都内を10箇所近く移り住んだ。記憶にあるなかで5度目の引越してここ八王子に越してきた。新興住宅街の町並みはどこも美しい。しかしなぜか私の目には最初“のっぺり”として映った。

そんなのっぺらぼーな街と大学を中央線で往復する日々がしばらく続いたある日。いつものように中央線が日野の鉄橋にさしかかった時、窓の外から強い光を感じた。何だろう、と思って顔を上げるとその光の正体は、なんと多摩川であった。多摩川は、夕日を水面に集め、その光を街中に放ちながら、眼下を悠然と流れていった……

今から思えば、その時の多摩川が特別に美しかったというわけでもない。ただ、何気ない一言や

ちょっとした仕草がその人を好きになるのに充分なきっかけであるように、私は一気に、そして徐々に多摩川に惹かれていった。

私の多摩川に通う日々が始まった。恋のはじまりと全く同じで、最初は「多摩川と私」という、1対1の関係が楽しくてしょうがなかった。一人で川辺の植物や水の流れをただただ眺めていた。

ところがそんな恋にちょっとした変化が訪れた。多摩川そのものだけでなく、多摩川に集まってくる人々のことが気になりだしたのだ。そこには、ひだまりの中を散歩する老夫婦、ラジコン飛行機を大空へと飛ばす人、黙々と走る少年…思い思いに多摩川とかかわっている人々が私の他にもたくさんいた。そんな当たり前前にことに気づいた時、なぜか何とも言えない穏やかであったかい気持ちが私を包み込んだ。

その頃はちょうど、ICUから東京農工大へ転学する事を決めた頃でもあった。多摩川を通じて、自然と人、人と人との関係をもっと深く考えてみたい、そんな私の気持ちをガシッと受け止めてくれる人々が多摩川にはたくさんいた。多くの奥底の深い魅力ある方々との出会いを通じて今、「多摩川とみ～んな」という関係の深さを、体と頭と心で少しずつ受け止めている真っ最中である。

多摩川との出会いによって「のっぺらぼーだったのは、街ではなく、私の方だった」ことにも、ようやく気がついた。また、フランスの川を見て「なんて真横になって流れているんだろう」と実感した時は、知らず知らずの内に私の中で多摩川が、川を見る時の基準になっていたことにも気づかされた。

今ならもし誰かに「出身地はどこ？」と聞かれても、私は迷うことなく答えることができる。「多摩川出身です。多摩川が私のホームリバーなんです。」という風に…

よみがえ

## 甦れ！多摩川

## ■ 浅川を歩くーその2 ■

(南浅川合流点～陵北大橋)

浅川は現在では北浅川が河川管理上、浅川となっており、南浅川と区別されている。明治の末に編纂された「大日本地名辞書」によると、当時は現在の南浅川のみが浅川とされ、北浅川は恩方川と呼ばれていたようだ。

浅川は延長43.15キロ。今回は南浅川合流点から陵北大橋まで、6キロほど上流にむかって歩くこととした。右岸にある八王子市役所から出発して、鶴巻橋を渡る。この橋にはりっぱなブロンズの彫像が、橋の中ほどや、たもとにあり、風格のあるたたずまいの橋である。左岸に移りしばらく行くと、対岸に南浅川(72号で紹介済み)が流入している。コサギが二三羽ゆったりと舞っている。川原の草木はすっかり枯れてしまって、寒々とした風景である。南浅川との合流点から200米ばかり上流に遡ると、城山川(75号で紹介済み)が浅川に流れ込んでいる。水位計がある辺りには排水溝があり、ミルク色に白濁した排水がよどみながら浅川に流れ込んでいる。浅川自体の川の流れは高水敷の1/4程であり、あまり水量がない、白濁した排水が流れ込むのが、くっきりと見える。清川河川公園にはゲートボール場があり、10人ばかりの人々がゲートボールを楽しんでいる。メタセコイアの化石林の掲示板に従い、中央高速道の高架の手前で川原におりてみる、川原を探しまわる。枯れ草と違って油断して歩いていると、ズブズブと靴が沈んで行き、慌てて足を移す。川べりにこんもりと盛り上がった岩のかたまりがいくつも見える。それがメタセコイアの化石林である。メタセコイアの化石の断片がそこらじゅう転がっており、一つを取り上げてみる。ごつごつした、黒褐色の木の肌が、ほんの昨日のものと思えるようにはっきりと保存されている。裏をかえすと、赤褐色の木目がくっきりと分かる。

松枝橋を過ぎるあたりには、河川敷を小規模に区切った畑がたくさんある、日曜菜園がさかんに行われているようである。こういうのをクラインガルデンというのかな、と思いながら歩をすすめる。3坪から5坪位の畑がみごと

に手入れがしてあり、なかにはちいさな川の流れを玉石堤でつくりあげて、ちょっとしたイングリッシュガーデンか、多自然型河原づくりみたいで、感嘆する。セキレイが5、6羽、ピィピィと鳴きながら、高く、低くとんで行く。

カメラを三脚につけたまま移動しているご婦人に行き違う。「バードウォッチングですか」と聞くとニコニコとうなずく、楽しそうである。

この辺りの左岸は丘陵が迫っており、段々と川幅も狭くなってくる。丘陵の中腹は枯れた雑木が煙ったようで、眠そうな感じである。

上壱分方小学校を通り過ぎる。子供達の声が弾むように冬空に響いている。川の堤と小学校の建物との間が北向きで日陰になっており、雪が解けずに残っている。浅川もこの辺りになると、左岸が丘陵になっているせいか、居住地が少なく、兩岸を渡る橋がほとんど無い。

多摩川漁協八王子支部の掲示が出ている。入漁証の料金が書かれてある。

アユ、コイ日券が850円、年券が4,640円、フナ、ウグイ、オイカワが

日券が450円、年券が2,500円、投網は一切禁止である。見付けたら、すぐ110番しろとまで書いてある。厳しいものである。

相変わらず、古タイヤが川のなかに放り込んでいる。この辺りの川の流れは豊かで、ミクリやクレソンが水中にいっぱい生えており、葉を流れにまかせて緑の帯をみせている。周囲の冬景色と対称的な風景である。

陵北大橋から上流を見ると、北に山入川が流入している。山入川はそこから500米ほど上流で小津川と分岐する。

これから浅川は陣馬高原へむかってのぼってゆく。



案内図

## 財団からのお知らせ

## 〈研究助成報告書完成〉

助成集報（25巻）並びに多摩川環境調査助成集（第18巻）が完成しました。

## 助成集報25巻

研究課題	代表研究者	所属
多摩川流域における魚類民俗に関する研究	秋篠 宮文仁	山階鳥類研究所総裁
多摩川流域における陸上動物の生態学的研究(II) -自然指標として昆虫類(蝶・蛾、甲虫、アリ類)-	三島 次郎	桜美林大学教授
多摩川中～上流涵養域の渓流水中無機態窒素濃度の地理的分布と窒素循環	楊 宗興	東京農工大学農学部助手
奥多摩湖に発生するMicrocystis属ラン藻のアイソザイムを用いた同定および毒性の予知に関する研究	原 慶明	山形大学理学部教授
多摩川下流域底泥における硫酸還元菌の核酸プローブによる解析とその硫酸還元速度との関係	瀧井 進	東京都立大学理学部教授
大気降下物による多摩川流域への汚染有機物の負荷に関する研究	森永 茂生	桐蔭学園横浜大学工学部講師
多摩川河川水の細胞毒性・遺伝毒性の調査	内海 英雄	九州大学薬学部教授
多摩川集水域におけるツキノワグマの生態に関する研究	山崎 晃司	奥多摩ツキノワグマ研究グループ
多摩川水系におけるニホンザルの分布と変遷 -群の土地利用-	細田 紀子	森林生態研究会

## 多摩川環境調査助成集第18集

研究課題	代表研究者	所属
水草から見た矢川の保全について -矢川における水生植物の年間変化と分布状況-	高橋 福子	矢川水質調査会代表
多摩川環境情報提供システムを活用した小中学校の授業における環境教育の方法	棚橋 乾	多摩市立西永山中学校教諭
明治期の多摩川流域におけるビール業の研究	牛米 努	税務大学校租税資料室研究調査員
多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者の意識と散乱ゴミの実態についての調査	小島 あずさ	多摩川クリーンエイド事務局代表
多摩川中流域における地学教材の研究	清水 政義	都立桜町高校教諭
多摩川の洗剤汚染調査-第一部多摩川、三沢川の水質調査・第二部五反田川の水質調査-	笹川 忠夫	川崎市立西生田中学校教諭
野川における児童(親子)の水遊び場・川遊び行動についての実態調査	尾辻 義和	野川で遊ぶまちづくりの会
現地観測に基づく日野市の水環境保全に関する水文学的研究	山本 由美子	浅川勉強会代表

## ▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

- 「保全生物学のすすめ-生物多様性保全のためのニューサイエンス」

著者 R・B プリマック 小堀洋美  
1997年 (株)文一総合出版

本書は保全生物学の概念から生物多様性の意義、地球サミットと各国の取り組みなど豊富なデータを駆使し、大系的にまとめてある。また巻末に「レッドデータカテゴリー分類表」、引用文献が収録されており、保全生物学の入門書とも言える。

- 「水辺の楽校をつくる-計画から運営までの理念と実践」

監修 建設省河川局河川環境課 編集 君塚芳輝  
1997年 (株)ソフトサイエンス社

本書は学校周辺の川を利用して、子供たちが川の中に入って魚を捕ったり、底生生物を採取したりと遊びを通して水辺に親しみ自然環境のしくみが学べるように先生方と子供たちの様々な実践事例が紹介されている。

## 多摩ルネサンス'97に参加して

1984年から毎年行われ、今回は第14回になる。

多摩川流域には70を超す大学が集まっており、研究機関、先端企業も数多く存在する。産、官、学、市民が同じテーブルで時代の課題を論じ合う場として、たいへん貴重な機会である。この地域の大学に所属する先生方が手弁当で研究、教育の忙しい合間に、準備、計画され実施している。このことに我々は感謝しなければならない。今回の当番大学は一橋大学であり、立川市の協力を得て、立川市のいくつかの会場で行われた。今回は、国際シンポジウムと市民フォーラムの二つから成りたっており、それぞれの全体テーマは、

“マルチメディア時代の健康社会づくり”

(11月14日)と

“高環境・高福祉の新世紀・多摩”

(11月15日)

である。ここでご紹介するのは、環境問題に関連のある分科会、第2会場でおこなわれたフォーラム、「廃棄物ゼロ都市の実現は可能か」である。

総合コーディネーターを藤田慶喜教授(桜美林大学)が担当し、第一部は「ゴミの完全リサイクル化は可能か」をテーマに藤田教授の司会で、問題提起講演「廃棄物ゼロを可能にする先端技術」について藤村宏幸(荏原製作所 会長)氏より講演があった。氏は、グローバルトリレンマー経済の発展、資源の枯渇、地球環境の保全が相互に関係し合い人類の危機を招来するおそれがあり、個々の産業が環境負荷の低減に努める必要があることを力説した。環境負荷の低減については、

- 1) クリーンエネルギーの利用、環境に配慮した資源の採掘、使用。
- 2) 産業プロセスでの使用後の排出廃棄物が無害であること。
- 3) 産業プロセス自体が、高効率であり、省資源、省エネルギーであること。
- 4) 廃棄物の有効利用、リサイクルを推進することと、ライフ・サイクル・アセスメントを徹底し、製品の設計、製造を根本的に問い直すこと。

を指摘した。

ごみのゼロエミッションについても、

- 廃棄物をガス化溶解するシステム
- 排ガス電子ビームにより処理、肥料として回収するシステム
- 焼却残渣をエコセメントとして再資源化するシステム
- 廃棄物を固形化して燃料として利用するシステム(RDF)

などの紹介があった。産業界にあって、環境関連の事業をおこなっている立場からの発言であり、具体性に富み、有意義なお話でであった。

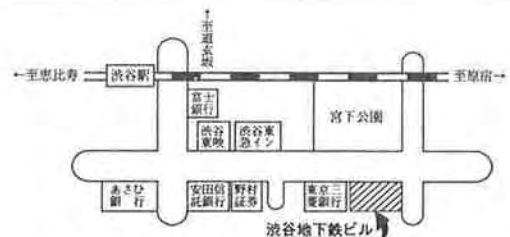
講演に引き続き、藤村氏に寺嶋均(東京都環境整備公社 技術部長)、中島信一(府中市ごみ減量本部長)、澁谷謙三(東京・多摩リサイクル市民連邦)各氏が加わり、パネル討論が行われた。興味深い発言としては、市民の立場として参加された澁谷氏がごみ問題を技術で解決しようとする考え方に対する疑問と、東村山市での実践活動の紹介があり、ひとつの新しい示唆が示された。

第二部は「ゴミ問題解決のための地域協力」をテーマに小山昇(東京農工大学教授)氏の司会で、問題提起講演「多摩地区におけるゴミ問題解決の途」について前田了介(東京市町村自治調査会ごみ減量・リサイクル推進室長)氏より講演があった。

講演に引き続き、前田氏に、大貫忠浩(立川市環境部ごみ対策課長)、江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)、百瀬武文(ワイ・エイ・シー(株)社長)各氏が加わり、パネル討論が行われた。江尻さんが市民の立場から、「白くない再生紙の学習帳」を使う運動を始めて7年目の活動体験の報告があり、ごみやりサイクルの情報が、たんに情報の段階にとどまるのではなく、具体的な行動に転換するためには何かのきっかけが必要である。そのためには、人と人をつなぐ絆が必要であるとはなしがあった。

フォーラム終了後、産、官、学、市民による交流パーティーがおこなわれた。

- 発行日 平成10年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03) 3400-9142  
FAX (03) 3400-9141



\*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125